

婦人の子死と毛

第五卷
第四號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年四月二日印刷
同 年四月五日發行

不許
複製

發行所 東京市麹町區飯田町四丁目十二番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北區館

會 告

本月二十一日(金曜日)午後一時半女子高等師範學校附屬幼稚園に於て本會總會相開き申すべく候に付き萬障御排除御知友御同伴御來會相成り度く候。

尙當日の順序は大凡左の如くに候。

一、開會の辭 會長

二、報告 委員

三、演說 知名の方に依頼中

四、音樂

合唱 會員
箏曲 會員
ピアノ

五、幹事投票

六、休憩(此間展覽)

七、茶菓(庭園に二三の休憩所を設けて茶菓を饗す)

尙幼兒成績品其他幼兒保育上の參考品は何卒前日までには御届け下さる様御依頼申上候

明治卅八年四月五日

フレール會

會員御中

婦人と子ども 第五卷第四號目次

子ども

駱駝追ひ……………やまとの翁……………一

お話大臣……………太田英隆……………三

指輪の遊び…………………………七

潮干とさげえ…………………………七

たんぼ…………………………八

君さんの摘み草……………太田龍東……………九

婦人と子ども

家庭幼稚園……………牧 羊……………二

家庭とは何ぞや(答案披露)…………………………五

故郷……………小林雨峯……………七

婦人と親族法……………太田英隆……………七

貞一の日記……………その母……………三

割烹……………石井泰次郎……………五

フレーベル會俳句端書集……………鹽野奇零……………七

家庭に於ける所感……………飯塚忠次郎……………九

子供のはなし……………和田藏……………四

保育者のため

附屬幼稚園分室報告……………附屬幼稚園……………四

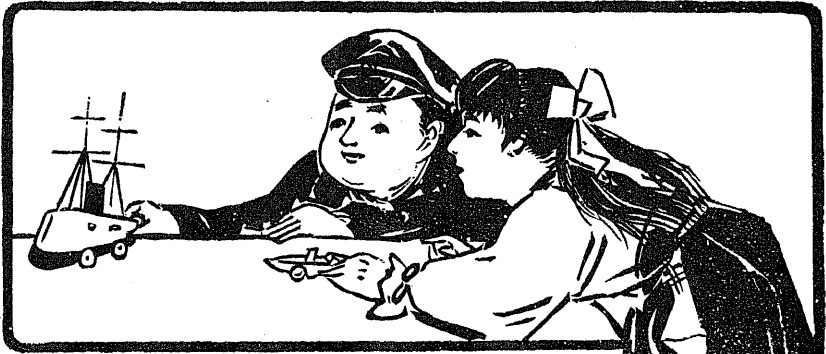
幼児の遊戯……………松村久……………四

保母の讀むもの澤山ある……………岸邊福男……………四

讀書の葉

小公子…………………………五

會報…………………………七



もど子と人婦

第五卷第四號

駱駝追ひ

やまとの翁

亞弗利加といふ所は、大層熱い
所ですが、其處には沙漠といつ
て、何千里とも知れない沙原が
あります。この沙漠には、山も
川もなければ木も草もありませ

ず。勿論水などもありませぬ。たゞ、時々チヨンボリした草地が見付かることがあつて、そこには草もあり芭蕉もあり又泉もあります。従つて、亞弗利加の中でも、沙漠は、尙更熱いのです。ですから、こゝを旅する人は、とても一人では通れない。大勢隊を組んで駱駝に乗つて行くですが、夫を隊商といひます。

今お話をするのは、この沙漠であつた話です。亞弗利加に、ハッサンといふ商賣人がありました。いつも、駱駝を逐うてこの沙漠を旅して商賣に出懸けるのでありましたが。ある時ハッサンは商賣先から、家へ手紙をよこしました。其手書の意味はこうなのです。

「私は暫らく、この土地に留まつて居なければならぬから、この

次^{つぎ}こちらへ來^くる隊商^{たいしやう}と一所^{いしょ}に、アリーをよこしてくれ、したら、私^{わたし}は、アリーと一所^{いしょ}に歸^{かへ}るから—

アリーといふのは、ハッサンの一人^{ひとり}子^こです。此^{こゝ}手紙^{てがみ}を見て、アリーのおっ母^{おつか}さんは、ひどく心配^{しんぱい}しました。まだ年^{とし}も行^いかない子供^{こども}を始めて、こんな遠^{とほ}い旅^{たび}へ出^だすのは、どうにも、危^{あぶな}い様に思^{おも}はれてなりませんのでした。しかし、又^{また}思^{おも}ひ返^{かへ}して、アリーは、子供^{こども}だといつても、も一^{たい}分^{ぶん}年^{ねん}も行^いつてゐるから、お父^{ちち}さんの仕事^{しごと}の手助^{たすけ}もしなくてはならない。まさか、危^{あぶな}い事^{こと}もあるまいと思^{おも}つて、いよく次^{つぎ}の隊商^{たいしやう}と一所^{いしょ}に旅^{たび}にやることに決^きめて、それく用意^{ようい}をして待^{まち}つて居^ゐりました。

アリーは又^{また}久^{ひさ}しぶりで、お父^{ちち}さんに遇^あへると思^{おも}つて、嬉^{うれ}しくて堪^たま

りませんでした、夫で、チャンと駱駝に鞍を置いて、水の洩らな
 い様にと、水瓶も新らしいのを取り代へるやら、いろいろ急がし
 がって用意をして居ると、おっ母さんは又おっ母さんで、残る方
 なく、アリーの爲に旅の用意を整へました。

其中に、とうく旅立ちの日が來ました。大勢の隊商が駱駝に乗
 っつてやつて參りました。夫でアリーも、日頃可愛がつて居った駱
 駝を厩から引き出して來ました。アリーはも一前から之に乗って
 沙漠に出かけたくつて仕様がなかつたのでした。アリーがこの通
 り可愛がつて居ますから、駱駝もアリーには日頃から、至つてな
 ついて居ます。もとは、お父さんが、さまく苦心して儲けたお
 金で餘所から買つて來たのでありまして。只今では、この駱駝の

お蔭で、アリーの家は食べられて行ける位、大切なものになって居ます。

駱駝といふと、皆さん、動物園なぞで御覧になったでせうが、あんなに大きな身體をして居ますが、夫でも、性質は大層柔しい獣なのです。で、アリーは自分所の駱駝を「綿毛」と名を付けて居ましたが、「綿毛」も極めて柔順で、アリーのいふ事なら、行ったり来たり、立ったり座はったり、何でも命令通りにします。

さて、いよく出發の日になりました。アリーはおっ母さんにお暇乞をして、皆とつれ立って、出かけました。一匹の駱駝は首の回りに鈴をつけて真先に立ちますと、其ガラン／＼といふ音を聞いて他の者は、夫について行きます。アリーは振り回って見ま

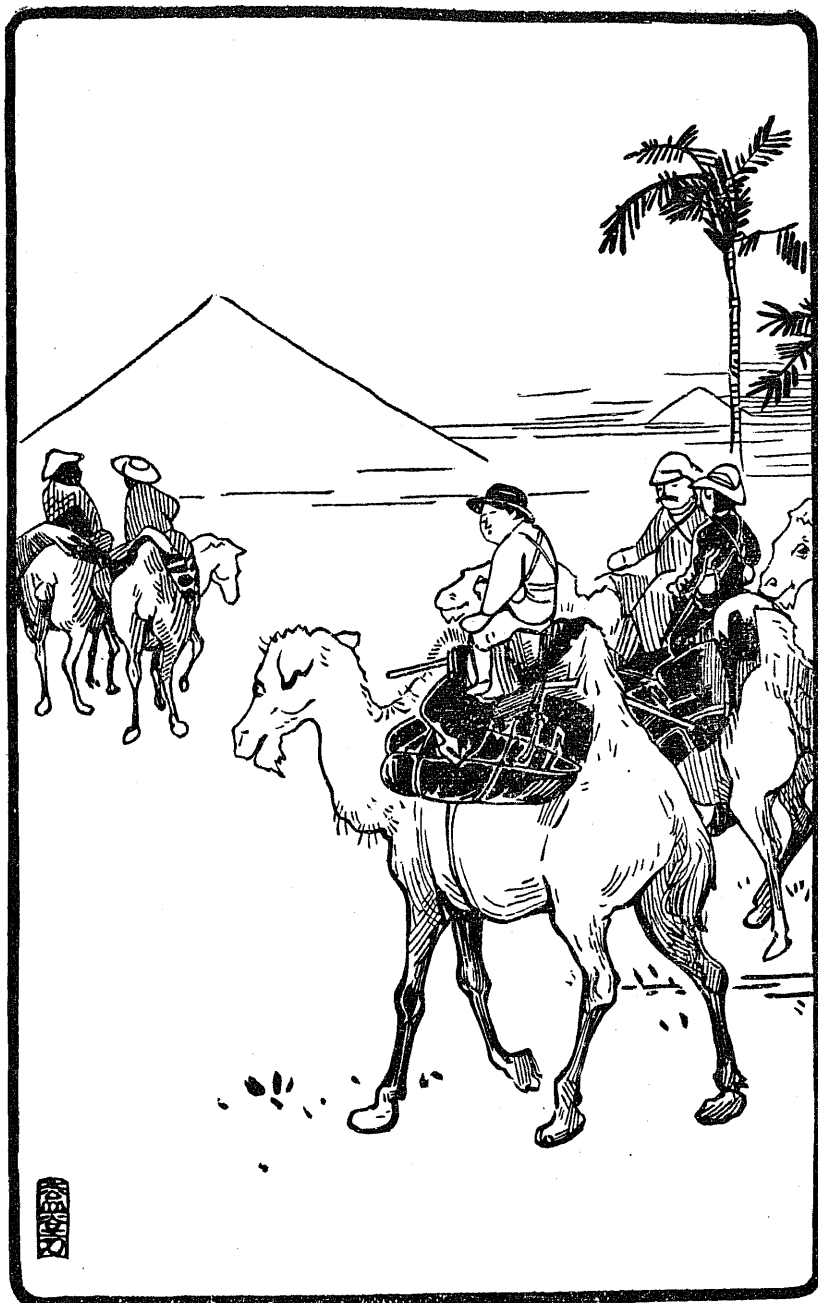
すと、おっ母さんは門の所に立ってじつと眺めて居らっしゃるの
 でいきなりハンケチを取って、帽子の上で振りますと、おっ母さ
 んも、頭に冠って居た手拭を取って高く振って居ます。

駱駄は、トットトットトットと歩いて行きます。駱駄追ひは、お互
 に笑ったり話したりして居ます。所で、大勢の中で、アリー一人
 が子供でありまして、話してくれる人もなければ、氣を付けてく
 れる人もありません。然し、アリーは中々きかぬ氣の子ですから
 そんなことには、一向頓着しませんでした。たゞ話し相手といふ
 のは、自分の乗って居る綿毛丈で、時々、其脊中を叩いては、
 ちきお父さんに御目にかゝれるのだといふことを話し聞かせて居
 ます。アリーの家を出た時は、朝早く涼しい時でしたが其中、日

が高く上って來るに従って、だんく暑くなつて來て、朝の涼しい風は丸で吹き已んで、お晝近くなつてからは、ひどく蒸せ熱くなつて來ました。

砂は火の様に輝く、見れるものとしては、砂と空との外に何もありません。其中、一同は少し許りの草地を見付けて、そこに休憩をするこゝになりました。然し、各自持つて來た水筒は今日は手を付けませんでした。何故かといふに、この所には小さな小川があつて、大勢は其流れてる水を飲んだからでした。尤も駱駝で見ると、幾日でも水を飲まずに居ることが出来るのであります。

暫らく休憩した後で、膝まついて居た駱駝は又立ち上ることを命ぜられる、乗手は其脊中に上る、そして一組の隊商は、此場所を



後にして進みました。

さて、其中夜になりましたので、此一組は、又或場所に陣取って休息しました。駱駝も座る、周囲には盛んに火を焼く、そして食物などが整らへられる。

さて、こんな風にして何日もやって行きました、アリーは、何だか、こんな事が大變面白い様に思つて、行くくは是非、こんな商賣をやつて行かうと考へたことでした。

こゝで、一つ申して置くことがあります。夫はこの沙漠旅行中の危険のことで、其一つは、荒っぽい「アラビア」人の盜賊に出遭ふといふ恐れですが、この度の旅行に於ては、幸ひ、之に出くわすといふこともありませんでした、所が、不幸にして、この「アラビア」

人よりも、もつと恐るべき沙漠の危険が起つて來ました。

夫は、沙漠中の暴風でした。此暴風は非常に恐ろしいもので、燒

き付ける様な熱風が、砂を捲き上げてやつて來た時は、夫こそ、

天も地も丸で、夜の様な眞闇になつて、鼻孔から眼から耳から

一面に砂を吹きこまれるから、とても顔を上げる譯には行かない、

この際はもう、皆が駱駝から下りて、地面にうつ伏せになつて仕

舞より他に仕方がないのであります。で、此暴風の爲めに、不幸

なる隊商等が一同砂の中に生き埋めになつて仕舞ふことなどが間

々あるといふことです。

所が、アリーの的一组は、此暴風には出遭つたが幸に無事に濟むで

しまつたので、さあ出かけ様としました所が、困つた事には、今

の大風の爲めに、砂漠中の踐み慣らされた道が、跡形もなくな
て仕舞ったのであります、道案内の駱駝追ひも、之では、どう行
つてよいか、さっぱり分らぬといつて、動かない。ずーっと眺て
見ても、一向、草地の様な所もあり相になし。どこが、西やら東
やら方角も分りませぬ。仕方がないから、皆は、或時は右へ行つ
て見たり、又或時は左へ行つて見たりして、たゞうろくして居
る許りでした。

そこで、皆がも一度より合つて、相談をした末、今度は、思ひ切
つて、日の入る方へ進んで見よう、ひよつとしたら、いゝ道を見
付けることが、出来ようも知れぬといふ事であつた。所が、そう
こうしてゐる中に、全く夜になつた。夫でも道が分らない、其上、

各自の水筒がすっかり空虚になつて仕舞つてるのだが、夫に水を入
 入れる場所も見付からない。一度か二度、誰かが、遠方で木の様
 なものが見えたといったが、然し、夫は、地平線に見えた雲の
 小さな塊りであつたのでした。さあ、こうなると、皆はもう落膽
 して仕舞つて、おまけに、風に出遭つてから、一滴の水も嘗めな
 いから、無闇と、喉が渴いて仕方がなくなりました(つゞく)

スプリング
 Spring.....春

エプリル
 April.....四月

フラワー
 Flower.....花

バード
 Bird.....鳥

キャメル
 Camel.....らくだ

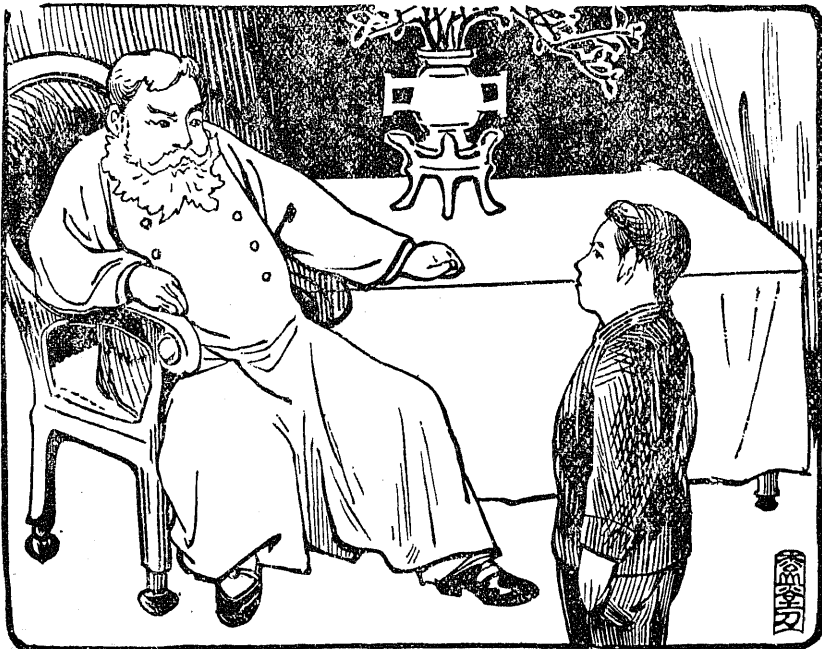
お話大臣

太田英隆譯

第一 王様の冗話好き

むかし、西洋のある國に、大層冗話好きな王様が
 がありました。若し、一日でも冗話を聞かない日
 がありませんと、その日は一日不愉快で、堪まらな
 いと云ふほどであります。それで、お話する人は
 代はる／＼宮中に入りして、一日も斷へたこ
 とはありません。けれども、何分長い年月のこと
 でありますから、お話する人を抱へるのに、だん
 ／＼困つて来るやうになりました。

そこで、王様は全國到る所に、お話の上手なも
 のは、誰でも早速宮中に申出よと云ふやうな公
 告をいたしました。すると、お話の上手な人はか
 り、われも／＼と申出ましたが、つまり其中で、



王様のお話役に、抱へられることになつたのは、花太郎と申す、若かい人でありました。

この花太郎と申します人は、年こそ若ければ話の方にかけては、それはく大したもの、もしこの人が、可笑い話をすれば、甚麼人でも腹を抱へて、臍が宿換へするほどわらひ、悲しい話をすれば、兩方の袖を絞るほど涙を出さぬ人はないと云ふ位上手であります。

この花太郎が、これから甚麼お話を王様に申し上げますか、皆さん、これからが見ものですよ。

第二 花太郎の奇譚

さて花太郎は、いよく王様の御前で、お話し申し上げることになりました、次にあるやうな不思議な事を語り出しました。

王様よ、私がこれから説き出す話説は、今から恰

度八十年前に在つた、世にも奇妙な事で、いいます。ある所に文雄と申す教員が一人ありました。この文雄は、いたつて釣が好きでありましたから、休日にはきつと魚釣に出かけます。

ある日曜に、例の通り釣道具を持つて、圓山川と申す河に釣に参りました。その日は、何時もよりは魚が澤山釣れまして、文雄も大そう喜んでその魚を數へてゐますと忽然その目の前に妖怪が顯はれたのです。その妖怪の身の丈の高さは二丈もあるかと思はれ、眼の大きさは鏡の如く、銀のやうに光つて顔の真中に一つあります。而して雷のやうな大きな聲を上げて

「爾は何故に俺の弟子を澤山殺すか、今は容赦ならぬ、俺爾の首を斬つて弟子の仇を討つから、早く前に出て覺悟しろ。」

と眼を睜いて叫びました。文雄は先程から、白くなつたり蒼くなつたりして、生きた心地はありませんが、今妖怪が、俺を殺すと云つたのを聞いて、慌忙ながら妖怪に對ひ、

『俺は、あなたの弟子は一人も殺しはいたしません、それは人違ひでありますから、俺の命だけは切望助けて下さい。』

と云ひますと、妖怪は、又大聲を上げて、

『人違ひではない、僕は時々この河に來て、俺の弟子を澤山殺すではないか、今も多くの弟子を殺してゐなから、人違ひとは何だ。』

と叱り附けますが、文雄は何の事やら少しも解りません。そこで恐るゝ

『俺は、この河には魚釣に參りますか、まだあなたの弟子を殺したことはありません、それは何か

の間違ひではありますまいか。』

と尋ねますと、妖怪は頭を打ち掉り

『いや、左様は云はせない、現に今澤山の魚を殺して持つてゐるではないか、この河には、俺の弟子が、日曜日ごとに遊び廻つて、この淵に來るのを、皆僕が釣つて殺すのである。俺の弟子と他の魚とは、頭に圓い斑點があるからよく知れる。』と云ひますので、よくその頭を見ますと、いかにも頭に圓い光つた斑點があります。それにしても、何故この妖怪が、この魚の主人だか理由が解りませんので

『それでは、あなたはこの魚の、親方でありますか。』

と尋ねますと、妖怪は

『俺は、この河の王である。而してその魚は魚の

中の智識のあるのを擇んで、頭に圓い印を附けて、俺の召使としてゐるのである。それに備は殺してしまふから、今日は仇を討つのだ。』

と云つてなかく聞入れる様子はありませぬ。文雄は悲しみながら

『俺は、そんな事とは少しも知りませぬ、ただ普通の魚だと思つて釣つたのですから、お慈悲に命だけは助けて下され。』

と頼みしに、妖怪は再び文雄に對ひ、

『俺は慈悲の心は少しもない、それで備は宥すことは出来ないから、是非とも殺すによりて覺悟をせよ、都て人を殺したものは、又其身の殺されると云ふことは、天地の公道であつて、妄りに渝へることはならぬ。いかに備が言を並べたとて、無益であるから、怎爲死ぬなら早く死ぬかよい。俺

が命は貰つたよ。』と云ひながら、大木の如き手をさし伸べ、首筋無手とつかみ大地へ動と投げ倒しました。大地に復仆つた文雄は、起き上る勇氣もなく涙を雨の如く出し。兩手を合せ聲を震はせて『开は餘り聞き分けない、俺が殺されたら後で悲嘆く人がありますから、惘然と思つて助けて下され。』

と頼みましたが、妖怪は少しも聞く様子なく聲を一層大きくして

『今になつて甚麼に泣いても、俺の弟子が蘇生て來なければ、備の罪は消へないから、宥すことは出来ない、何の道死ぬ命なら、快よく死ぬよ。假令無罪の者でも、俺が一旦殺さうと思つたなら必然殺さずには居られぬ。まして罪ある備を、什麼して助けて置くものか。』

と太刀を振り上げて、一討と斬りかけました。こゝまで語り來りしとき、花太郎は王様に對ひ、
 『王様よ、これにて私の今日の役目だけは済みましたから、この話續きは、明日いたしますことにして、今日はこれで御免被ります。』といつてお話をやめました。(つづく)

指輪の遊び

其一

七八人で、輪を作つて、一筋の紐に指輪を通して其紐の兩端を結んで輪にして、各自夫を兩手で握つて、アチラコチへしごいて居る、指輪は、夫に従つて、又アチラコチラへ回り歩いて誰の手に居るか分らない様にする。そして、真中に一人居て此人の手に指輪が這入つて居ると思ふと、其人の

手を捕へる。あけて見えないといふと、又始めるお仕舞ひに捕はつた人が真中に出て、其番に當るといふお遊び。

其二

矢張り同じ程の人数で輪を作つて兩手を擴げて膝の上に置く。真中に一人指輪を持つて、周圍の人の兩手を指輪持つた手で軽く叩いて行くと、叩かれた人は、皆手の掌を握る。そして誰か其中の一人の手の掌に指輪を置いて行く。そうすると、指輪は、誰の手の中に握られて居るか分らない。そこで、他の人が一人出て、『誰さん』といつて、指輪を握つた人を言ひ當てるのです。若し當て損ねたら、其人は罰として何か藝をやらされる。

潮干とさゞえ

今日は潮干だから、大勢人間の子どもがやつて来るに違ないと思つて、海の貝どもは皆恐がつて小さくなつて居ました。其中で一匹のさぐえが「なーに、大丈夫、己の貝殻は硬いから、そんな中に這入つて、こんな風の上から蓋をして居れば、とられたつて大丈夫」といつて威張つて居ました。そうして居ると、何だか、急に身體中が熱くなつて来て、とても、貝殻の中に居たゝまれなくなつたので、ひよいと、身體を出して見ると。何時の間にか、人間の子につかまつ

て、壺焼にせられて居ましたとき。

た ん ぼ

野や山には、今たんぼ、が盛りです。皆さんは、たんぼの花が、晝は開いて居て夜になると、萎むのを知つて居ますか。これは、植物の運動です。もとは、運動といふことは、動物に限るものとして居たのですか、近頃になつて、植物にも、運動するものが澤山あることを見出しました。たんぼ、だの豆の種類の花の様に、晝開いて、夜閉ぢるのは、睡眠運動といひます。又ねむのきなどは葉が睡眠運動をします。この他に、他の物が行つて觸ると、すぐ下向く葉の植物などがあります。又日回りの様に日の方に向つて運動する植物もあります。

君さんの摘草

太田龍東

(上)

寒さは去りて春來たる、

花は笑ひて鳥うたふ。

妾ことしの試験には、

第二の席で四年生。

うれしや雨は霽れ上る、

黒雲流れて風は止む。

明日の第四の日曜日、

樂しや摘草喜しいな、

早く明日が來ればよい。

姉さんよいかこしらえは、

呼んで來ますよ友達を。

梅さんお出で呼びに來た、

妾今朝から待つてよ。

それぢや之れから皆さんと、

行かふや早く摘草に。

籠は一昨日叔母様の、

肩打ち賃に戴いた、

お錢で昨日買つて來た。

(中)

母様留主を頼みます、

土産はたんと此籠に。

いーえ嘘ではありませぬ、

さつと歸りを見て御覽。

道案内は姉さんよ、

妾は後に梅さんと、

手を引き連れて歌唱ひ、

楽しく二人でついで行く、

ほんに嬉しい今日の日や。

天氣のどかで風もなく、

蝶はみ空にひーらひら。

廣き野邊には草花が、

赤白黄とこきませせて。

中にもすみれ蓮華草、

たんぽぽなどは美しく。

君さんお出で梅さんも、

待つて居ましたさあ遊び、

と云ふのは誰、花の神。

(下)

遊戯は何か赤十字、

梅さん妻が教へます。

手を取り歌を唱ひつゝ、

前に進みて左むき、

止まりてそこで一二三、

拍子とつて又返へす。

次は鬼ごと面白や、

姉さん鬼で眼をかくす、

鬼さんこつちらばつちらばち。

すみれもよいが此花は、

何と云ふだろきれいだね。

これも母へのお土産に、

われも母へのお土産に。

籠には最早這入らない、

姉さん歸る日が暮る。

手に持つ花を慕ひ来る、

蝶よお出で共にゆこ、

今宵の宿はこの籠に。

(完)

婦人と子ども



家庭幼稚園

我國と獨逸其他の西洋諸國と較べて、幼稚園へ子供をやるに就いての考の違ふことの一つは、外國に在つては、普通の幼稚園へ子供を出すのは、大抵中流以下の家庭に多い。少し宜い身分の家庭では、普通の幼稚園へ出さないで、各自家庭に幼稚園を作つて、そこで、幼児を保育して居る。所で、我國の今日の幼稚園の有様は、どうかといふと、之とは全く反對で、幼稚園へ子供を出すものは、寧ろ中流以上の家庭である。實際からいふと、幼稚園の必要は、寧ろ、中流以下の子弟に、より多いのである所からして、今日の我が國の幼稚園の此風は、幼稚園教育振興の上から見て、多少面白からぬ現象だといふこと

は事實である。

然し、この外國のと日本との違は、いろ／＼社會上の事情の違ふ所からして出て來たのであつて、只其顯れて居る丈の所を見て、一概に一方がよいとか悪いとかいふことは、出來まいと思ふ。日本では幼稚園へ出すにも、一圓とか、五十錢とかの保育料は要る、日本の下等社會の人々といへば義務教育の尋常小學へすら之よりも尙僅かの費用を出して、入學させることの出來ないのが多いのだから、まして、幼稚園へどうして入園させることが出來よう。同じく下等社會といつても、日本の労働者と外國の労働者と、其富の程度が餘程違つて居るのである。

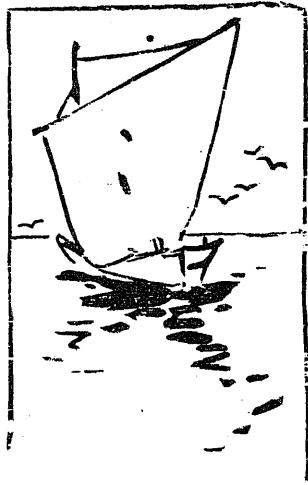
然し、こゝでは、此問題に付きては論じるのではない。外國に多く家庭稚幼園を見る所からして、我國でも、此種類の幼稚園を始めては、どうかと思ふのである。尤も、東京でも、或西洋人の家庭では、之を實行して居たといふことであるが、其方法はこうなのである。

先づ、子供のある、五六の家庭が組み合つて一つの幼稚園を起すとする。而して、第一其場所は、其組合の中で、廣い家が在れば、其家と決めても宜しいし、又、今日は甲の家、明日は乙の家といふ風に、順々に一日／＼代へてもよし、或は又、一週間とか十日若くは一月毎に代へて行つてもよからうと思はれる。次には、保姆である。吾人の最も希望する所は、其組合のおつ母さん方が代はる／＼出て、一日五時間とか、三時間とか、働くといふことである。といふと、そんな呑氣なことは、吾々の家庭の妻に

はやらせること出来んといはれるかも知れない、勿論、忙がしい商賣人なぞの家ではとても出来まい。然し、我國の中流以上の家庭では、随分、これよりも、一層呑気に暮らして御出での奥様もあらふと思ふから、僕はそういふ方々に御勧めするのである。といふと又、だつて、教育とか保育とかいふ事は一向知らない者に出来ない仕事じやないかといはれるかも知れないが、夫は譯もないので、若し、其氣さへあれば、其組合のおつ母さんたちが、組み合つて、其道を研究する方法は幾らでもあると思ふ。夫でも尙、いろ／＼の事情のために出来ないといふ事なら、仕方がないから、適當な教育を受けた保姆を雇つても宜しからふ。

先づ、こゝにいふ風に、園舎も出来、保姆も出来た。そこで、組合の子供たちが、今日は誰さんの家、明日は誰さんの家といふ風に集まつて、今日は誰さんのおつ母さんが先生、明日は誰さんのおつ母さんが先生といふ様になつて、そこで面白い、團欒的の幼稚園が出来ようと思ふ。そうなると、普通の幼稚園へ出すよりも、第一、自分等の子供を氣心のよく和れた子供等と一所に置く所からして安心であるし、又、先生といふのが、眞實の母たちだから、各自十分の愛と責任とを以て其任に當る、も一つは、家庭の事情が先生方に十分別つてゐるから、保育に至極都合が宜しいと、又衛生の上からいつても、經濟の上からいつても、殊に都合がよからふと思はれる。此風の幼稚園は、今日の時局に際して、一層面白く行くではあるまいか、今や、我軍は旅順に奉天に、着々大捷を得たと同時に、我が忠勇なる陸海軍將士の、

名譽めいよの戦死せんしを遂とげた人々ひとびとも頗すこぶる少すくなくはない、從したがつて、之等これら名譽めいよの戦死せんし者しやの未亡みぼうじん人々ひとびとが、東京市内とうきょうしちないでも随分多ずいぶんおほからう。而そして、此家庭幼稚園このかていゑうちゑんは即すなはち、之等これらの人々ひとびとに取りとりて、其忘そのわすれ形見がたみを守まもり育そだつる方法ほうほうからいつても、又其仕事またそのしごとの上うへからいつても至極適切しごくてきせつな事業じぎやうではあるまいか



(牧羊)

家庭とは何ぞや

先達せんたうてから、募集ぼしよしました此問題このもんていの解答かいだうを披露ひろうします。數も餘り多く集あつまらず、よいのも比較ひかく的てき少すくなかつたのは甚はなはだ遺憾いかんと存ぞんじます。左さに載のせました他ほか、文辭ぶんじ語句ごくう意味いみも、あまり面白おもしろからずと思おもはれた分ぶんは、相談さうだんの上うへ、掲載けいさいを見合みあはせました。

「小兒こどもには發達はつたつ、大人おとなには安息あんそく、老人としよりには怡樂いらく」
この三つの要求えうきようを満足まんぞくせしめんがため、夫婦相和ふうふあいわして其理想そのりさうを實行じつぎやうする所ところを家庭かていといふ。(二等)

牛 込 訪 莊 生

少し文辭ぶんじが長くなつたけれども、とに角言かくごひ盡つくして居ゐりませう。たゞ安息あんそくといふ代しろはりに、新しい生命せいめいといふ意味いみの言葉ことばが欲ほしい様に思おもはれます。が、先づ、評議へいぎは之これを白眉はくめいと推おししました。

胃ゐには一日三度いちにちさんどの食物しょくもつ、心こころには、常つねに無限むげんの食物しょくもつを與あたへらるゝ所ところ。(二等)

神 田 一 二 三

よほど奇抜きへつな面白い言ことばひ廻まわしてありませんか。
暗くらき世よの罪咎つみとがも、愛あいの光ひかりりに照てらされて、此處こゝには其影そのかげだも見みえず。(二等)

本 郷 ひ な 子

地上ちじやうの天國てんこくが甘あまく言ことばひ顯あらわはされました。

先づ右みぎの三者さんしやを選えらびました。次つぎのは、とりくに面白おもしろい節ふしもございませうが、どれも大抵たいていよく似たものでせう。

伊 豆 瑞 枝

神聖しんせいなる秩序ちつじよと眞まことの愛あいの集合しふがふより成なれる保護ほご所しよ家庭かていとは互たがひに世よの勞苦らうくを慰なぐさめ心身しんみを養やしなふ一の樂園らくえんなり。

京 橋 坂 山 つ き

(1) 我等われらが天職てんしやくの源みなもとの如ごとく又海またうみの如ごとく
(2) 君子花くんしくわの如ごとく天然てんねんにして馥郁ふよくたらんことを欲ほつす

(3) 試験管中の如く異分子によりて變更を見るべし

愛 旺

王水を盛つた試験管の如し如何なる物も融解し去るといふ風に言ひたいですね。

家庭とは、あらゆる人の(父子夫婦より婢)スマイル交換所なり。

大 阪

エム、エヌ、

すまへると微笑のE.M.O.とにかけて顯はした所が仲々甘く出来ました。

妻の耕し母の培ふ樂園

神 田

極樂園主

父の耕し母の培ふ子供の樂園とたしらどうでせう。

家庭とは社會に於ける人類の生活上より來れる最小集合體なり。

木挽町

N S

何だか餘り理屈つばいではありませんか。

(1) 複雑なる世の競争場裡を遠く離れての樂園なり

(2) 人生に新生命を興ふる平和なる小天地なり

小天地であつて又大天地だといふ様に言ひ顯はしたいですね。

(3) 無限なる慰藉と無限なる喜樂を吾人に興ふる場所

長 野 飯塚忠次郎

一番餘計に不平を鳴らしながら一番よく待遇せられる場所

小石川

M、H、

極めて實際を穿つて居ます。一番餘計に喧嘩しながら一番仲のよい場所としたらどうでせう。

家庭とは子を産む所なり。子を産む爲には父母あり。父母ある爲には先祖あり。子を養育する爲には衣食住の三要素の必要あるなり。其要素を充たす所の者は家庭各分子の活動の結果なり。其分子の不調は家庭の不和波瀾となり、又其調和は家庭の團樂となる

小石川

平岩繁治

實際でせう。

選定の當日選定者の中で、次の様なのを出した方がありません。御笑草に供します。

父嚴・母愛・兒樂・三角同盟之地。

不文律を以て統治する一國家。

家庭には愛の光の照り渡り

年々中闇の世はなし。

我が庭は世の浮雲の影もなく

愛の光をあびてたのしむ。

故郷

雨峰生

筑波の山を仰ぎ見る

わが古里の春の色

心かよわきわが身しも

天のうたけに酔されて

今日も一日をくらすかな

旅より旅の苦を忘れ

この自然のあたゝかき

慈悲の心にいだかれて

又

山はかすみて何笑ふ

川は流れて何かたる

千歳をちぎる桃の村

朽ぬ姿の松村

こゝわがすめる古きさと

婦人と親族法

太田英隆

緒言

ある貴婦人と話をしましたときに、其婦人が「人は幾歳に達したら婚姻をすることが出来るか、又甥と姪との間に於ける婚姻は、法律上甚麼もので

すか。」と云ふ問を受けました。此問題は、吾々生活、上時々起る問題であつて、又何人にも之れを知つておくの必要があります。さうして此の問題は、左程六ヶしいことではなく、別に法律を知らんでも、親族法の片端を一寸見ればすぐ了解することでありませう。この親族法は、一家を組織する原素即ち父母、子孫、兄弟、姉妹相互の關係及び夫婦關係又は戸主と家族との間柄等を定めたるものであつて、苟も人類が一家を成して生活する上は、何人に限らず是非知らなければならぬのであります。

全体我國民は、法制思想に乏しい國民と言はなければなりません、凡そ一國々民は、其國の法律を遵奉せねばならない義務のあることは言ふを俟たず、その大体だけは心得て置かねばならないの

であります。それに前に申しました婦人の如く、高等教育を受けた人ですら、婦人に必要なる婚姻法を知らない位ですから、他の婦人に於ては、はゞ之れを推知することが出来ませう。私がかく申しますと、ある婦人は「法律は男子が知つておれば婦人の知る必要がない」と申されるかも知れませう。否實際あつたので云います。尤も法律は理義が深遠でありますから、之れを専門に研究せねば詳しいことは解りませせん、が、其人に直接必要な法律だけは、男女を問はず其大略を研究しておくのは、生活上に於て必ずしも不必要でありません。女子に必要がないなど、申されるやうな婦人が澤山あつては、男女同權だの女尊男卑だの言ふことは、所謂百年河清論で、實際に行はれ得べき事は、まあ六ヶ敷いませう。と云ひまし

ても婦人「ハイカラ」論を主張する譯ではありませ
 ん。

輓近世界文明國と稱せらるゝ各國の國情に付て
 之れを見まするに、人が國を治むると言はんより、
 寧ろ法律が國を治むると云ふ思想即ち「レヒツス
 タート」の觀念が大に發達して、吾人日常生活
 に於ける凡ての行爲は勿論生命身体名譽に至るま
 で、皆法律を俟つて始めて安全を得らるゝ状態を
 呈するやうになりました。それでありませすから
 國民たるものは、その國法の大体に通ずるの必要
 があります、之れに依つて見ますれば、國民普通教
 育の一科として、法學の大躰を授ける必要のある
 ことが明かであります。近頃各種中學程度の學校
 に於きまして、法制の大躰を科するやうになつた
 のも、つまり之れに基いたのに相違ありません。

まだ社會がそれ程まで進歩しませんから、之れ
 を婦人に論及するのは少し早過ぎませうが、親族
 法の大意くらいを知るの必要あることは前にも申
 上げた通りであります。そうしてこの親族法は、
 他の法律の如く深遠なる法理を含蓄してゐるもの
 ではありませんから、通常の學力があれば何人
 も大意を知ることが出来ます。殊に親族法の規定
 は、道德上の本分に淵源することが極めて多くあ
 りまして、倫常の道が此法に其適用を示すこと少
 なくありませんから、此法の研究は、徳性の涵養
 を第一義とします國民教育特に女子教育には、最
 も密切の關係を有してゐると言はねばなりません。
 右述べました如く、親族法研究は女子に必要な
 るばかりでなく、人が母の胎内から出で「ホギヤ

「」の初聲を發するやすぐ親族關係を形成し、
て、什麼しても其圏外に離脱することが出来ない
と同時に、親族法の適用は、一日も吾人の頭上を
離るべからざるものであります。不錯しますと、
親族法は他の諸學科に比べて、人生に多大の實用
あることは極めて明白であります。それで私は之
れから、親族法の大意を通俗的に講述せうと思ひ
ます。

第一章 親族總論

第一節 親族法の意義

人類には生理上自ら男女の別があります。この
男女の別がありまして茲に初めて夫婦と云ふ關係
が生じて來ます。夫婦がありますれば從つて親子
とか兄弟とか又姉妹とか云ふやうな關係が生じて
參ります。この關係を指して親族法では家族關係

と申します。

人口は日に月に増加するものでありまして、家
族がある以上は、其兄弟は妻をとり姉妹は嫁に行
き、又其人が子を産む、其子が結婚する、或は分
家すと云ふやうな有様で、初めは小さな範圍であ
つたが、増加するにつれて漸々大きくなりますこ
とは御承知の通りであります。我が民法では之れ
を親族と申します。

この人等は生活するに必要な、それ相當な物
品を持つてゐるに相違ありません。例へて申せば
家を持つ人、金を持つ人、田畑を持つ人、山林を
持つ人と云つた様に、大なり小なり各それ／＼の
持分があります。この皆が持つてゐる持分を互に
保存する必要があります。若し他人が自分の持分
即ち所有品を無理に取るものがあつたなら、之れ

を取られないやうにせねばなりません。併しこの時は強い人が勝つて弱い人が敗けるのは當然であります。しますると弱い人は、自分の財産を安心して保護することが出来ないやうな事になりますから、法律でこれを世話をして遺らねばなりません。これを財産関係と申します。

右申しました家族の關係親族の關係及び財産關係を規定したものが、即ち親族法なのであります。今言を換へて之れを定義的に云へば左の如く申されず。

親族法は私法であつて親族家族の身分及び其財産關係の權利義務を定めたものである。

親族法の意味は、この定義が解ればそれで可いのであります。その内に私法と云ふこと、權利義務と云ふことのあるのをまだ申しませんでしたか

ら、一寸申しませう。

(イ) 私法、法律を分けて公法と私法とにすること
が出来ます。公法と云ふのは憲法とか刑法とか行政法とか云ふやうな、國と個人との關係を定めたもので、私法とは民法、商法の如く個人間の關係を定めたものを云ふのであります。さうして親族法は私法に屬する民法の一部であります。すから、私法と申したのであります。

(ロ) 權利、權利とは、戸主はある事に於ては家族に命じて之れを守らすとか、夫は妻の行に制限を附するとか、又は他人に物を貸せば期限が來ると返せと請求することが出来るやうなものであります。

(ハ) 義務、義務とは、ある事に於ては家族は戸主の命を守るとか、人より物品を借れば、期限に

は返さねばならないとか云ふ如きものを言ふのです。

右に申したる所で親族法の大意を知ることが出来る。としますれば、それでは親族法と云ふのは血統が連続しければ皆親族と云ふ事が出来るかと云ふ問題が起ります。そんな廣いものではありません、民法では第七百二十五條に左の如く規定してあります。

一、六親等内の血族

二、配偶者

三、三親等内の姻族

右によりて見ますると、親族は血族、配偶者、姻族の三種類ある事が知れます。之れによつて以下親族關係を説明します

(つづく)

貞一の日記(明治卅六年五月)
卅一日生男兒)

三十二

その母

二月廿日 夕飯後母と二人にて、ひらいたの遊戯をせんとすれば、傍にある父にも、仲間入せよとせまる、風車など、數回つゞけて、遊びしに大喜びなり、父も母も立つと余り高くて、貞ちやんには 苦しう故父は座りたる儘、歌を唱ふと、貞ちやんも一所になつて、しやがむ。

二月廿一日 醫師の勸告により、粥の代りに一回ミルクトーストを予ふ、喜びて食す、今日は牛乳凡そ七勺許り飲みたり、

小原先生より、牛乳試用の結果如何との、御尋ねあり、日々猪口に二杯づゝ、オートミル、若くは粥に入れて予ふる旨、御返事申上しに、さらば今日よりは、一日に四杯づゝに、増して試

みるべし、又ミルクトーストを作りて與ふべし
とのことなり。

二月廿二日 牛乳を一合、ミルクトースト或は粥
に入れて食する様になれり 元氣よく舉動頗る
活潑にて、少時も静にして居らず、近頃の玩具
は幼稚園積木を横に數個、つゞけて併べ、又三
つも四つも高く積み重ねる事なり、

二月廿三日 本日は醫師に、其後の發達の狀況を
報告せんが爲、真ちゃんを連れて、診察を受け
に行く、牛乳の無事に、すゝむに就ては、先生
も頗る安心せられたる様子なりき 本日一合な
らば、明日は七勺又其次の日は一合五勺とし
漸次一合或は二合として、増加すべしとの事な
り

体重 九五七〇、〇

食事 粥と魚肉三回、牛乳一合とパン一回
二月廿七日 豆腐屋の呼聲をきゝて、アーウーと
叫ぶ、畫の手に猫の寫眞あるを、見せしに、
熟視してニヤ／＼といふ、

食事 粥と魚肉、(三回)鶏卵一個と小燕及びに
んじんを添ふる事一回)

二月廿八日 六寸ばかりの虫、肛門より出でたれ
ど、別に異狀なし。

三月五日 父母と教會に行き、人々の首をたれ眼
を閉ぢたるを見て。コー／＼といふ、眠りたる
者と思ひしならん、

此頃は朝床の中にて、兩手を出し、夜具の襟の
所にて、ピアノを弾く眞似をする事が好なり。

三月六日 安田さんに動物園へ連れてもらひ鳥の

群れ居る所を喜び、去る事をいやがり駱駝を見
て恐がる。

三月八日 今日安田さんと、電車にて、日比谷
公園に行き、小學生徒の競技を見る勝ちたる方
の生徒、万歳と手をあげしに、自分も、一所に
手をあげる

此頃は小用の時、必らずジャー〜といひ、又ワ
〜といふ、これは犬を呼ぶ心なり、

積木を幾個も、長くつゞけてシユツ〜といふ
瀛車のつもりなり、

三月十日 小原先生より、其後の成績を見たき故
一度連れ來よとの事なれば、安田さんと一所に
行く

体重 九八四〇、〇
にて成績大によろしと、ほめられて歸る、皆々

喜ぶ中に、不消化らしき便通三回わり心配す、
此頃は、夜間一回ウエプアーを與へ居りしが、風
月へ行くひまなく、代りにビスケットを、予へ

しが悪かりしならん
三月十一日 朝十時頃少し吐く、小原先生の許に
行く、原因は、ビスケットか、牛乳の消毒充分

ならざりし爲ならんと食事表を頂く便通四回

朝 ミルクトースト (牛乳七五瓦)
晝 粥二碗 魚肉

おやつ ミルクトースト (牛乳七五瓦)
夕 粥二碗 魚肉

便通平生の如くなりし後は、七五瓦を一〇〇瓦
にし粥の後に、五〇瓦を手へ、一日に三〇〇瓦づ
ゝの、牛乳を手へ、やつがしらじやがいの、百
合、にんじん、かぶなど、とりかへて予へ、魚

肉も、しほやき、てりやき、煮付、など料理法をかへ

さしみ、十笏、焼魚六笏、煮魚八笏

といふ割合にすべし、焼けば水分少くなる故、さしみの時などよりは、量少くて宜しき譯なり、焼魚の時は何か、汁をこしらへて予ふべしとなり、

三月十二日 元氣よし、便通も二回になる、父羽

田より、雁と雀の玩具を、買ひ來りしに、ガークといふ、鳥とかもひしなり、

三月十三日 便通一回になり、其質もよろし

三月十四日 病氣も快くなりたれば朝の牛乳だけ

増して一〇〇死とす

朝ミルクトースト、牛乳(一〇〇死) 晝、粥二碗、カレイ煮付

おやつ ミルクトースト牛乳七五死 夕、粥二碗、カレイ

割 烹

石井泰次郎

まへの今様に引かへて、今度は前方よりの取て置の御れうりを一つならべて見ましよう、

いも玄んじよの拵方

薯蕷を生にて皮をむいて、山葵おろし金にて、すりおろして、搦盆にてすりて、吉野葛粉を器に入れ、水にてとがして少量づゝ加へて、摺のばし、折に入れ、蒸籠に入れてむす、むしあがり取出し、さましれきて、折をはがして、切方して、葛湯に酒を少し合せたる鍋に入れて煮て、取上て、椀にもりて、葛餡をかけて出すべし、わさび、すりせ

うがなどを、一つまみ上おきにかくべし

葛餡くわんの拵しらへ方は、葛粉くわふ、又は片栗粉かたくりこを（十四匁）

水みづ（一合がふ）にてとかし、上水うはみづを流し去りて、又

水少みづすこし加へおき、別に鍋なべに水四合みづがふを入れ、炭火すすび

にかけ煮たてて、醬油しやうゆを六勺しやうい入れ、砂糖さとうを八匁もんめ

鹽しほを四匁もんめい入れ、味を試みて、後に醬油しやうゆ（こゝに

用ひたるはすべて濃こき品しななり）二勺しやういを加へ、葛

粉こなと加したるを、よく煮にたちたる鍋なべの中へ、左

の手てにて入れ、右みぎに杓しやく子こを持もつてなべぞこを能よく

かきめぐらしながら入れて、つくるなり、

○割合わりあひは多少たせうとも右みぎのわりにてよろし、

すくひいもの拵しらへ方かた

玉子たまご三つに、湯婆ゆばのほさぬもの玉子たまごの量りかたほどを合

せて、搗盆すりばちにてすりて、其中そのなかへ、むきおろしたる

山やまの芋いもを入れて、すりて、豆腐とうふをも布ぬのにて水みづをし

ぼりて加へて、吉野葛粉よしのくわふを加へてよくよくすりま

ぜ（葛粉くわふは他の器うつはの中なかにて茶碗ちやわんなどにておして粉

となして○又藥硯なぐさぐんにておろしてもよし）薄玉子色うすたまごいろ

にして、深ふかき鉢はちに入れて、蒸籠じやうろうに入れて、むし、

むしあがりて後に、金杓かねしやく子こにてすくひて、椀わんに盛

て、上うへより、あんをかけて出すべし、上置うは置きはすり

せうが、わさびをおくべし、

飛龍頭ひりゆうづの拵しらへ方かた

これも山やまの芋いもにてつくる、生なまにて皮かわを剥むき、おろ

し金かねにてすりおろし、搗盆すりばちにてよくすりて、豆腐とうふ

を布ぬのに包つつみしぼりて、すりばちに入れ、すりて、

寒晒かんざらしの粉こなをかたまりなきやうくだきて、其中そのなかに入

れて、よく搗すりまぜて、もしかたければ水みづを少すこし加

へて、さて其中そのなかへ木耳きへらけぎんなんしんなん椎茸しひたけなどをさざみ

て入れて、椀わんの中なかの蓋かきにつけて、胡麻ごまの油あぶらを煮にか

へしたる中に入れて、ざつとあげて、いろくに
煮物にも、汁物にも用ふべし、

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 四月二十五日限り

一、披露 明治卅八年六月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にも投吟する事
を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物
隨意）住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

第九回俳句端書集

鹽野奇零宛

福引や無慾な子ほど大わたり 東京 辰己 我庵

泣た子の供して行くや奴風 同

雨やみて霞む野山や麥二寸 埼玉 田村 破笠

若鮎や綱打つ空の薄ぐもり 同

傾城に歌乞はれけり月かぼろ 東京 藤並ゆかり子

江上の春また淺し旅の宿 同

溝口に一とかたまりの根芹哉 埼玉 黒田 素人

囀りの聲麗はしき野山かな 同

鶯の聲潔よし朝日和 埼玉 帶白園一甫

如月や夜雨上りの野の景色 同

旅宿から相生傘や春の雨 長野 飯塚 曉霞

菜の花や藁屋二軒の這入口 同

春雨や蕭條として柳原 陸奥 須藤 美佐

花七日心野にあり山にあり 同

麗や錦の砂の東濱 同

海苔摘むや風なき海の暖かき 同

朧夜や白酒賣の小提灯 同

裾村の川に春めく小鮎かな 同

菜の花や十万石の城の跡 東京 平岩 學洋

春の水人の心に流れけり 同

春寒し日蔭に凍る繻れ炭 仙台 立花 一瓢

若草や枯野の名残處々 同

馬ばかり酒屋の門の柳かな 同

朝風や小鳥の聲に霞む山 越後 加藤 春陽

草餅や生れた家へ客に来る 同

梅一と木暮れ残りけり藪の中 信州 今井 一舟

片側の崖高くして葦かな 同

人去て物静かなり梅に月 大和 津谷 柏山

一と渡しかくれてもよし春の月 同

雪洞の影に小さき雛かな 同

飛石に陽炎の立つ小庭かな 上野 加藤よし子

潮の香や素足つめたき遠干潟 豊前 金子 琴月

舟を曳く高瀬の川やとぶつばめ 岩代 荒木 柳江

飛ぶ鳥のくゞる様なり八重霞 栃木 櫻井 閑山

月影も馴染まぬ夜なり猫の戀 岐阜 野寺 幽韻

土を抜く芽獨活に霜の別れかな 上總 高橋 波月

白魚や花に濁らぬ隅田川 大和 淺見 秋夢

涙多き配所の歌や櫻鯛 常陸 落 花庵

皆酔ふて漕ぐ人もなし花見舟 武藏 山田だるま

鼓打つ能樂堂や春の月 東京 井上さよ女

三 光

天、訪ひよりて逢はざる戀の春寒し 藤並ゆかり子

地、焚捨てた煙りに深き余寒かな 立花 一瓢

人、摘草や忘れて來たる藁草履 山田だるま

追加 無一庵鹽野奇零

雨多き旅の日記や惜む春

草鞋賣る軒端の低し糸柳

軍神の俤見えて散る櫻

あした立つ奈良の旅寐や惜む春

寫生して暮るゝ裾野や夕霞

薄曇る霽や門田の初蛙

編輯記者白す。此俳句集、前一回分郵便上の間違のためによ到着せず、爲めに前號には掲載するを得ず、目下調査中なれば、了承あらんことを乞ふ。

家庭に於ける所感

長野市 飯塚忠次郎

(十三) 小兒と依頼心

小兒が何故に依頼心を惹起するようになるでしよ

うか、此問題は小兒のあるお家庭ではとくと御注意なさつて、十分御考究なさるべきことではないかと思はれるので御座います、さてそれはどういふことが原因となるのかといつたならば（小兒が此の依頼の心をおこすといふことには）種々ありましようが第一に家庭に於ける平素のしつけによることは申すまでもありませぬ。それであまり小兒をわまやかしたり、小兒の言ふ事を一から十まで、其出來得ると得ざるをとはずさいてやるやうにすると、そこから何事をなすにも人たのみをする様になつてゆくの御座います、私はこのようにならばはいふてそだてるのは眞に小兒を愛育するといふものではなからうと思ふのです、習慣といふものは恐るべきものであつて、自分よりめうへのもや下女下男を使用するなどは何

とも思はなくなつてくる、よし自分の力で充分に
 できうるをでさへも「あゝしてくれの」こうして
 くれの」と、とかく色々なことをいふ様になつてく
 る、そこで其要求依頼によつては自身で出来得べ
 きことはなるたけさせるようにしむけて、できな
 いことはやむをえんからして、してやるといふよ
 うにせねばなりません。「小兒がかわいそうだか
 ら」といふていちいちしてやる、小兒の方からみれ
 ば自分の要求がきかれるのですからして、それは
 たしかに満足をするでしょうし、またよろこぶで
 しょうが、しかしながら一歩退いてよくかんがへ
 たならこのようなことは一時はよいかもしれぬ
 が、こんなありさまで小兒をそだて、ゆくについ
 には「ほうつといてもたれかゝやつてくれるだろ
 う」といふぐはいになつて誠に一寸したことがら

では御座いますけれど、小兒の後來のために最も
 よくないことであるといふことはたしかのちゝつ
 と思はれるのであります。「かわいゝ兒にはたびを
 させる」といふことばのあるのを皆様方もごしよ
 うちでもありましようが、最もあぢはふべきこと
 であると愚考致すのであります。
 父親が小兒に對して命令しておいたことをいへの
 ものが自分から手をくだして「ないしょ」でしてや
 るなどのことは大に考へむければならぬことで
 す、若しもこんなことをしてやつたなら、小兒も
 自然としらすしらすのうちに「ないしょごと」をす
 るようになり、自分のことがあまねく大となく小
 となく用ゐられるゆへ、わがまゝになつてきま
 すし、それにつれてだんだんと依頼心は増進して
 まゐります、そうなる、さゝいなことでも何で

もかでも人手を要するようになってきまして、自分の力でもつて充分にできることであつても「めんどうさい」といふて人だのみをする、ついに依頼心は一變致しまして、怠慢の心を生じて忍耐とか勇氣もつれてなくなつてしまひます、そうなるに常に人にばかりたのみにしてゐますからして、自分のものも人にいちいちきかなくつては何がどこにあるやらわからなくなつて、一寸なにごとかしてみようと思ふても人にきかねばわからぬ、自然そうなるとはうつとくから、ものが紛失しやすくなる、一度ものでもみえなくなると「誰かやしまつておいてくれ、ばよかつたのに」と、そうゆうふうな小兒にかぎつて怒たり泣いたりそれはそれはドタバタしてヤンチャンをいふてひとりのなわではなかなかきかない、よく小兒のめん

どうをしんからしてみてくれるようなめしつかいでもあれば萬事氣付くからよいかもしれぬが、其多くは義務的であるから、小兒のちらがしたものをこれはいるものであるかいらないものであるかといふことを深くみやるほどのものはまづないからして、そのときになつてどこへやつたるうなぞと大騒をすることはめづらしいことではない、何事もしつけの方法でどうでもなるもので御座いますからして、世の一人人たちは出來得ないことはしかたがないですからしてやつてもよろしいですが、小兒の力で充分にできることは如何なることを論ぜさせなければなりません、之も獨立心を養成するの一端でありますから、大に其風習を御奨勵あつてしかるべきこと、存ぜられます、單に小兒がかわいそうであるからといふてはつとい

てはなりませぬ、まことに嫉けの良否は小兒其もの、幸不幸がわかるるさかえめでございますからしてくれぐれも御推考あつて「こうやればこうなる」こうすればわゝなる」と小兒育成のゆくすえのことを深くかんがへてやらねばなりませんこと、思はれます、實にちよつとの手かげんでまゐることができるものもかどだつてでますことゆへ、何卒このへんのこととはあしからず御考へになつたが大切なことゝ存じます

子供のはなし。

和田くら

私の世話をして居る幼児等の多くは中以下の者でございまして入園當時より能く家庭の状況を告ぐる者がございす是等の者の言行を一つ二つ御覽に供してどうか御批評を願ひたいと思ひます

▲さのふ山崎さんと歸り途で奇麗な五錢銀貨を拾

つたから交番へ届け様と思つてうちへ歸つたらお母さんは届けなくとも宜しいと云つて二人に分けてくれました(男五年四ヶ月)

▲晩におばさん所へお嫁さんが来るつてけさうちから鯉節を台に載せてあげたのですよ今に其人がうちに来る時には何か僕にお土産を持ちて來てくれるでせうね(男五、四)

▲うちには三人小僧が居て一番小さいのはづるい小僧です何故つてばいつでもお芋やお菓子や豆を買

ひにやるとさつと中途で半分位取るから(男五、一〇)

▲共同遊嬉にて一同打雜りて遊び居りしが不圖走り來り「先生袴に水が付いて居ますから拭いてあげませう」と云ひつゝ自分の手巾を取らせし故拭

ひ貰ひぬ(男四、八)

▲おとゝひお祖母さんと一所に買物に行て歸りて

か汗粉を食^たべたけどもおばあさんは誰^{だれ}にも黙^{だま}つて居^ゐろと云^いつたが正直^{しやうじき}に云^いつた方が宜^よいと思^{おも}つてお母^{かあ}さんに云^いひ付^つけたらお母^{かあ}さんはい、子^こだつて云^いひました(男五、九)

▲昨晚^{さばん}六阿彌陀^{あみだ}へ行^いつた時^{とき}女中^{よぢやうぢゆう}がうそを云^いふと舌^{した}を抜^ぬかれるつて云^いつたけれども其^そんな事は^{こと}うそです
ねなせみんなが其^そんなうそを云^いのでせう(男五六)

▲けさお父^{とと}さんが火鉢^{ひばち}の抽斗^{ひきだし}からお菓子^{くわし}を出^だして食^たべたもんだからお母^{かあ}さんに叱^{しか}られましたよお父^{とと}さんとお母^{かあ}さんとどちらが豪^{えら}いのですか(男五、一〇)

▲僕のぼくのわが小ちさい時^{とき}分^{ぶん}手^てを挫^{くぢ}いて名倉^{なぐら}へ行^いつたら其處^{そこ}の醫者^{いしや}は療治^{りやうぢ}する時^{とき}に「あ、鼠^{ねづみ}が來^きた、猫^{ねこ}が來^きた」
なんてうそを云^いひながらなほしてくれたいよ(男)

そう私^{わたし}の行^ゆく醫者^{いしや}はまだうそを云^いひませんよ(女)

(男六、〇)
女五、九)

▲うちの兄^{にい}さんはいつもお父^{ちち}さんに内々^{なな}で煙草^{たばこ}を吸^すつて居^ゐる所^{ところ}を僕^{ぼく}が見^み付^つけても云^いはずに置^おくと後^{あと}にお錢^{おぢ}を呉^{くれ}るの(男六、三)

▲登園^{とうえん}するや或保姆^{あるはほ}の机中^{つくえひのなか}を片付^{かたづけ}るを見居^{みる}たりしが急^{きつ}に思出^{おもひだ}せしが如^{ごと}く「先生^{せんせい}月謝^{げつしやく}はいくらたまつたの」と問^とひたり月謝^{げつしやく}は銀行^{ぎんこう}の人預^{ひとあづか}り行^ゆく(毎月^{まいげつ}定日^{ていじつ}に銀行員^{ぎんこういん}出張^{しゆくちやう}する故^{ゆゑ})
なれば我^{われ}には知^しり難^{がた}き旨話^{めいばな}したりければ「そんなら聞^きてごらんなさい
無^なければ持^もつて來^きて上^あるから」(男五、一〇)

▲此頃^{このころ}はお母^{かあ}さんが病氣^{びやうき}でつまらないから毎朝^{まいてつちゆう}幼稚園^{ちゆうえん}へ來^きる前^{まへ}に觀音^{くわんおん}様に病氣^{びやうき}のなほる様^{よう}に願^{ねが}つて居^ゐるけれども未^まだなほらないの(男六、五)

▲時々^{ときとき}お辨當^{べんぢやう}を麴包^{もちぱん}にする所^{ところ}をお父^{ちち}さんに見^み付^つかると叱^{しか}られるから此頃^{このころ}はお母^{かあ}さんが内所^{うちどころ}で麴包^{もちぱん}にしてくれますよ(男六、四)

保育者のため

女子高等師範學校附屬

幼稚園分室(第四卷第
千一號續)

一、各幼兒に關する調査

幼兒全數五十名の内普通の者を除き、或特徴ある者、特異なる心身の狀態を有する者、其他注目すべき者等のみを掲ぐ、年齢の下に記すは父兄の職業なり、

(い)男)六年十一ヶ月 八百屋

江戸兒の下等社會の標本とも言ふべきか、俠氣と言は言ふべき質を帯び、如何なる事にても頼まれば明瞭なる一言の下に快諾し、其人の爲に盡す、自己の權利を主張せん爲に稍もすれば腕力に訴へんとす、但し其事終れば洒落意に介せず、從

て何人とも淡泊に愉快に交際す、言語舉動野卑粗暴常に強く大なる音聲を發す、

諸心力の發達普通何事にも一諾の下に着手すれども、智力的の考及其發表の力之にかなふにあら

ず思想周密を欠き、手技の如き熱心に工夫を廻らすなどは面倒くさく他兒のを模倣してすまさんと

する傾あり、勉めて着實の氣風を養はんとし、家庭にも注意したれども、家庭家族其他四邊の狀況

は此兒を沈着に導く資に乏しく、十分の目的を達する能はず

(ろ)女)六年十一ヶ月 父なく母は仕立物をなす

伶俐にしてよく大人の意向を知る、其心の廻り加減、推察する事の深き、注意の周到なる、禮儀作法をあまりよく心得てわざとらしく之を守る、言語舉動の老成といふべき迄に沈着なる、世才に長

せる、表情を容易にせざるなどの諸点に於て、著しく子供らしからず不自然なり、之は其祖母が唯一の孫として愛するあまり行儀よきしとやかなる女たらしめんことを望み、大人と子供の心身の差異とか、幼児に適度なる事とかを辨へずして、無暗に行儀をやかましく訓へし爲に、老女の如き幼女となりしものなり、此点に付き祖母に説きし結果又幼稚園に於て無邪氣なる多数の幼児と交はる爲に在園三年の間に漸次幼児らしくなり、入園當初に比して退園の際はよほど普通に近くなりぬ、

(は)男)六年十ヶ月 印刷業

鋭敏伶俐にして感情家なり、才智は廻り過ぎる位にて一体に早熟の氣味あり、之は家庭に於て父母初め雇はるゝ職工などが、此兒を賢し面白しとしておもちやになし様々の事を注ぎ込むより出でた

るにて、爲に幼者ながらに頭痛を知り時に之に苦む事あり、

(は)女)六年六ヶ月 人力車夫

聴官に故障ありて聴覺鈍かりし爲、知力の發達著しく普通よりも遅れたり、特に言語にて思想を發表する力乏しく、問へども答へず又は僅かに言ふのみ、加ふるに家庭にて耳遠を遅鈍の子として取扱ふ爲に強情にしてひがむ傾あり、耳の治療を勧むると共に取扱に付て母に注意して以來漸次良き方に向ひ發達しつゝあり、

(は)女)五年十ヶ月 鐵砲製造所職工

一人子にして家庭にては祖母と靜かに遊ぶを常とし起居飲食の世話亦祖母の引受くる所なる爲にいかにも老人じみたる處あり、常に大人の言行を綿密に觀察批評す、祖母に注意して後稍幼児らしく

なりぬ、

(へ) 五年十ヶ月 父なし母は裁縫を教授す幼

にして父を失ひし不憫に加へて季子の事として母姉の鍾愛一方ならず、従て温かなる情感を有し他愛の情に富む、但し父なき家の自ら淋しく殊に女兒弟のみにて家庭は屢々父なき悲しさを此兒の居る時にも語るもの、如く、時に大人の様なる口調にて亡父に付て物語る事あり、而して何事をも悲観する傾あり、全く家庭の境遇より生ずる結果なれば、幼兒に對してあまり悲哀を説かぬ様に物淋しく心細く思はしめぬやうに、母に注意したるより、大分愉快なる方に向ひ來りぬ、

(と) 五年八ヶ月 集金人
 家庭の境遇 上父母に別れ祖父母の許に養はれ、其家族は此子を危介物視する 傾あるを以て、自

ら心ひがみ邪推深く、常に不愉快不満が心にひそむ様にて、感情の發達圓滿を欠き、穩ならず怒りすねる事多し、之等は全く愛の欠乏に基くものなれば其旨祖父母に説きたると一面保母の愛に感ずる様になりたると兩方にて稍圓滿なる方に向ひつゝあり

(ち) 五年六ヶ月 砲兵工廠職工

不屈不撓の精神氣骨に富み事をはじむれば障害に遇ふも後るゝも決して失望せず熱心に成し遂げて後止む、確固たる強き意志を有し何事も理性に訴へてなし不當と認むる處は如何に他兒が之を誘ひ之に迫るも従はずしかも保母には極めて従順、之等の点に於て大人もはづかしき迄の長所を有す、其母の身上話に由て察するに母は幼時より諸種の困難を経來り心身の鍛練を受けしものにて此兒の

性格は主として母に由るもの、如し (完)

幼稚園の遊戯 (其六)

松村 ひさ

保母は遊戯の時間をあまり永くしてはならぬ。もしあまり永すぎると、しまひには子供的心をも身体をも治めて行く事のできぬ様に、よく統御もできぬ様になつて来る。

之は遊戯に限らず何でも幼児にさせる事はあまり長くつゞけ過ぎると、幼児は倦み疲れて興味を失ひます。そうして元氣なく沈むとか又は氣晴らしにさわぐとかいふ風になります。こうなると先生の命令などはあまり守られず、幼児は自然に各勝手な休息法をとり又は變化を好む天性を満足させん爲にさまざまの事をはじめま

す。之を制して保母が或命令を出す、守らぬといふ風ではよほど訓練上害のある事で、其此處まで至らぬ間即ち或事をして居つて佳境から段々倦むといふ場合に進まぬ迄にやめてしまふ事が必要であらうと思ひます。

保母はあまり多くを言つて自家の品格を下げてはならぬ、王位に居つて確固たる力を保ち隠然たる勢力を以て幼児の指導者となつて居る様でなければならぬ
自發活動を許すは大切な事であるが、之が嵩じて幼児をして亂暴にならしめるやうな事があつてはならぬ

活潑と亂暴、之は稍もすればまちがひ易く、之位は活潑でよいと思つて居ると何時の間にか、亂暴に流れてしまひ、之を御して行き又矯正して

行くのに大きに骨が折れるとか、又は當然制すべき幼児の亂暴なる言行を活潑なりとして捨て置くうちに益亂暴な兒になつてしまふなどはよくある事かと思ひます。私共は幼兒を眞に良い意味の活潑な兒にしなければなりません。これには協同遊戯を甘く用ひて行くといふ事が必要でございませう。

遊戯は幼兒の經驗内に於て理解されるものを教へねばならぬ、即ち其年齢の幼兒の智識思想によく適して居らねばならぬ。あまり大人びた事を教へ過ぎて幼兒を早熟させてはとりかへしがつかぬ。智慧のない譯の分らぬ人が見て感服し、幼兒であつてあんな事がよくもできたもの、とはめる様な遊戯をさせて得意になつて居るなどは、まらがつた話である。

保母は幼兒に對して兵隊扱に手足をどうして居れどか頭をこういふ風にとか、あまり身体に付ての位置などをやかましく言うてはならぬ。こういふ方にあまり注意を向けると用心の遊戯に對する興味を幾分か減じ感情を殺ぐものである。

保母は幼兒の内の二三の者の爲にばかりなる様な遊戯を何時でもするといふ風ではよろしくない。少くとも幼兒全体の喜を結合するものであるべきである。

保母は或特に發達した幼兒が何時でも或遊戯の必要な部分を占めるといふ風にしむけてはならぬ。何となればこういふ風にされると進んだ幼兒が日光の恵に浴して居る間に、他のあはれな小さい兒は段々日陰の方で退歩して行く。

之は多勢の幼兒を集めて一緒に教育して行く場

合に必ず注意しなければならぬ事でございませう。たとへば或一人の有力な兒が何時でも先登りになる、あとの兒は何時でもくっついて歩くばかりといふ風な事になりますと兩者の力のへだちが益々多くなりまして全体の爲になりません。それよりは全幼兒のどの兒でも先登りになるだけの力を有つて居るやうに導くのが、多數の兒を預つてなるべく一同を良く教育して行く私共の責任でございませう。

保母は天氣に由つて適當な遊戯をするやうに、幼兒の心身の發達に適當する様に氣を利かさねばならぬ。たとへば寒い空氣の乾いた日に高い聲のいる様な事をしたり、暑苦しい日に蒸氣罐の遊をするなどはいづれも適當に撰み得たりとは言はれぬ

(完)

保母の讀みものは澤山にある

東洋幼稚園保母 岸 邊 福 雄

昨年末頃の本誌上に、東君が翻譯して掲載された、エー、エル、ハヴ君の、米國セントルイス博覽會幼稚園教育部會に報告中、日本の幼稚園は近年長足の進歩をして、其數も少なくないが、只だ恨らくは、此の教育に従事せる保母の研究に當てたる書物が皆無の姿であるから、一向に進歩改良が出来ないとの意味に付き、一般の保母達が、如何なる感じを以て讀んだかと思ひ、其後小生の幼稚園に來觀した人々、並に知人のものどもに、實際保母の研究する書物が無いのかと問ふて見ると、いづれも同感との事である。なかには幼兒教育を無視する結果だなど、憤慨様の氣焔を吐くのもあった。

處で、ハヅ君の説は、特に保姆の爲めにと書いたもの、即ち幼稚教育にのみ關して著述したものととの趣意で、保姆か教育者として研究するに適當なる書物がないと、云ふた譯ではあるまい。例へば、肉も魚も野菜も、夫れ／＼調理してご馳走に拵えてないと云ふので、肉も魚も野菜もないと云ふたのではなからうと察せらるゝ。もしも左様でない、ハヅ君の眞意を知るに苦じのである。又日本では保姆の研究資料がない、學者連中も不親切だなど、不平を漏らす人々も、同様の見解であろうが、こゝ一つ研究ものであらうと考えらるゝ。何せなれば肉もわり魚もあり野菜もあり。只だ僅かに手を下して料理するならば、立ち所に海山の珍珠は味う事が出来るのに、其一舉手一投足の勞を惜んで、其好良の材料を隻手傍觀しなが

ら、飢を呼ばるものがあるならば、何人が其困狀を誠として、一掬の涙と一椀の飯とを與へるものがあろうぞ、寧ろ其餘りに怠惰で氣儘ものなるに悪く／＼しき感じをさえ抱かせるであらう。なるほど、加減よく料理して、サアおあがりと供せらるゝのは、自から手を下して後に食べるよりも、都合は善いけれども、夫れは完全な場合を望む、一種の贅澤で、時と場合によつては、自から料理人にも主人にも又お客にもならなければならぬ事もあるが如く、幼稚園教育に關しての著述の少ないのは事實だが、之れは止むを得ない、と云ふものは、當今全國の幼稚園の總數か三百位である、折角恰好の著作が出来た處で、其需用が少ないから、營利をのみ標準せとる書店が、到店出版する道理がない。此現狀は、こゝ三年や五年經た處で

容易に變りはあるまい。すると、保育の爲めに、著者は人も出版する書肆もあるまいから。小生が語つた人々の如き心懸けの保姆達を満足させる好著は、先づ得られない。すると、學は薄く識見には乏しく、只だ其日送くりの經驗位では、何年かゝつても到底幼稚園教育の改良も進歩も企てる事は出来ない、實に残念の次第である。併しながら、茲に肉もあり野菜もあり尙卵も魚もあるとしたならば、更に馳走がないとは云へない。勇奮一番、禱あやどおりお聲をはしより、鍋坐に入つて包刀を執るの元氣と熱心さえあれば、よしや他人の手をもつて造くられた、滋味でなくても、手作りの美味に鼓腹の太平を謠ふ事を得るは容易の業であるが如く、研究の資料についても、今一段の奮勵をして、熱心に之れを求むるならば、所要の參考

書は續々と與えらるゝのである。

元來吾れゝ保姆は、教育に従事して他より先生と尊重せらるものゝ内で、一番に學問が少ないのであるから、手あたり次第に通讀しても、悉く得る處がある。幼稚園の保姆は、只だ保育に關する事のみ讀み、小學教員は、僅に教科書の配當表や教按のみを目にして居る様では、教育者の最大なる意義を貫徹する事は出来ない。教育なるものは、社會の進歩に隨伴して進まなければならぬので、學校教育は元より、家庭教育に於ても總て進歩的でなくてはならぬから、其家庭教育を補助するところの幼稚園も、無論進取的であるべき筈である。此邊の議論は随分重大な問題で、職に保育の任にあるものは、疾くより研究しなければならぬ。さりながら、之れらに就き、特に幼稚園教

育の爲めにと著作されたものはない。多く學び博く讀んで自然に一個の意見も出來方法も定まり茲に初めて主義ある保育法となるのである。更に詳細に論ずると、多枝に互り復雜となり、此の小冊子では述べ切れないから、今一二項を掲げると、子供の行儀作法である、人が世の中に只だの一人住むなら、左様な六ヶ敷ものは、米粒程も入らないが、二人以上住むとなると、是非共なくてはならぬ。夫れ故、今日の如く進歩せる社會となつては、餘程大事な事である。が、之れは人生最極の目的ではなくて、人類相互の關係を圓滿にする一種の方便であるから、教育上の全力を、茲に集注するが如き愚を演じない様になければならぬ。田舎ものと云へば、不行儀不躑で、都會のものには三文の價値もない様に嗤はれるが、さて我國に

於て、國家の盛運を謀り一國の柱石となつた人々は、この都會人士の嗤笑を蒙りし田舎ものに多い。子供に行儀作法を教えるのが、保育の主眼など、考へ損いをするものもあるまいが、こゝらは程度問題で、餘程細密に注意を要する處である。由來華族は此の行儀作法を、八ヶ間敷云うたのであるが、さて其結果は憫れむべきものが多い。小生が詳論しないで、左の文を掲げる。之れは奉天の會戰に、名譽の戦死をした、伯爵南部中尉の遺書なる華族論の一部である。

現今の華族は、悉く眞に上流に位するの品位を有しあるや、果して國家の干城、皇室の藩屏たるの實を擧げつゝあるや、余は残念ながら悉く然りと云ふを得ざるなり。
講釋師が華族と書して馬鹿と讀ませ、新聞小

説の主人公は多くは華族にあらざるはなきは
 何ぞや、華族にして眞に其品位を保ち其責を
 全うすれば、講釋師何ぞ此の言をなさんや、
 小説家何ぞ此の筆を執らんや、思うて茲に至
 れば痛恨に堪えざるなり。
 と、行儀や言葉扱いのみに汲々として居るものが
 あるならば、幼兒の教育法を、餘りに單純に見積
 らないで、世の趨勢を考えなければならぬ。併し
 之れとても、保姆の爲めにと便利に書き示したも
 のはない。矢張り多く聴き廣く調べて、初めて自
 家薬籠中のものとなるのである。又、女子の教育
 法とても、今日は甲唱え乙論すで、歸一して居る
 譯でもないが、一般 優美なる女子を成くれば夫
 れで當初の目的を達した様に澄し込んで居るもの
 もある、賢妻となり良母となるにしても、事に

敏き智慧と物に優しい情ばかりでは、到底役立た
 ない。之れを實行するの元氣がなくてはならぬ、
 某家庭雜誌に、妻を主人が呼ぶにオイコリヤ、は
 前世紀の口癖で、奥様と云ふのは文明式だなど、
 書いて居るが、夫れらの形式上の事は何んどでも
 變えられようが、變らないのは妻の實質で、實際
 に主人を助けて共々事業の成功を謀るの膽力と手
 腕のわる入はぬれ、一般に厄介物の様に見える、
 今や我國も東洋の日本ではなくで、世界に於ける
 大日本帝國である。此後青年子女は是非共、此の
 大きな檜舞臺で働かなければならぬ。僕は今から
 米國の勞働者となり、十年許り働いて、一と儲け
 をして來るから、お前は針仕事なりとして、子供
 を養育して居れ、其内には花もさき實も上る身の
 上に成つて來るから」と相談を持ちかけられて「夫

れは面白い、飛ばなけりや腰も打たぬとやら、後は心配には及びませぬ、旅用が不足なら、私の帶も賣りましよう」と勇まじき決心を持つて、主人の奮發を助ける様な氣丈夫な女子が入用ではあるまいか、今日の女子は概して消極的で涙脆くて、男子の事を妨げても助けるなどの眞似も出来ぬと聞く。果して然るや否やは知らないが、もしも事實ならば、男子的の性質を女子に加味しなければならぬ。是亦大問題で、研究の餘地が澤山ある。して此種の事は、幼稚保育に關係しない様に考へる人もあるならば、痴人の仲間であらう。けれど、之れも保母の讀むものにとて備へた書物は無い、廣く問ひ多く讀んで、初めて暗中に灯火を得るのである。

かの不平の保母達の中には、讀んでも了解出

来ない事があるも、懇切なる教示を受けるの便がないと、嘆く人もあるが、幸にも東京には元良博士を會長とした、兒童研究會なるものがある。フロニエル會の主幹なる中村五六氏も、其理事とかである。去る二月其公開講演が帝國教育會であつた。尚毎月一回開かるべき筈、講師はいづれも熱心の諸氏、此時を利用して質問するならば、喜んで懇切に教授して呉れるのである。

保母の讀む書物がないなど、嘆聲を發するを止めて、何でも讀むがよい、哲學書を讀めよとは保育に無關係の様であるけれども、子供の美感を研究せんには、是非其此書に寄るべく、大酒呑みの子供の發達の不良は、遺傳學を研究すべく、顔色蒼白運動遲緩にして泣き易い子供は、先づ營養の如何を調べねばなちぬから、生理學に問はねば

ならぬ、尙其他にても同様、殊更に幼稚園保育の爲めにと、著作してなくても、活眼を開いて活書を読めば、得る處は莫大である。海山の珍味を全く整えて、サアか上りと差し出さなければ、食べないとは飽食の贅澤人が云ふ事で、飢に瀕して居るならば、材料さえあれば一舉手一投足の勞は惜まない筈である。保姆の讀みものなき尙飢渴の感と同様なら、先づ圖書館に往つて一日を費せ、實に今日の嘆聲は夢の如く消ゆるであらう。

讀書の葉

小公子

故若松しづ子女史の譯、原書は、リットル、ロールド、フアントルロイといふ名で、外國でも有名な家

庭小説である。大分前に譯せられたので、今日では、もう忘れて仕舞はれたかの様にもあるから、更に茲に紹介しよう。

主人公は、セドリツクといふ可愛い子供、父は英國の侯爵の第三子、母は亞米利加の身分なき婦人、此婦人、結婚した、めに父は、故郷の侯爵から殆んど勸當同様になつた。其中に此子が生れて、間もなく父は死去した。所が、侯爵家では、相続人がなくなつてとうとう其相續者としての運命は此可憐なセドリツクに回つて來て、米國から英國の侯爵家に迎へられることになつた。然し、此侯爵即ちセドリツクに取つてのお祖父さんといふ方は子供の愛などいふ事は知らない上に非常な癡癡な頑固な方で、殊に米國嫌と來て居るから、セドリツクのお母さんを惡むことが甚しく、仕方なし

に子供丈けは御殿へ入れても母はどうしても入れない。御殿の近邊へ別に家を興へて、母を住はせて置くといふ始末。然るに、此セドリツクは、丸で天の使の様に出来て居て、小さい時から、頼りないおつ母さんを慰めるのが、お父さんのなくなつた後の自分の役目だと信じて、小さい心でさまたく工夫しておつ母さんを慰める。これはお父さんがおつ母さんを常に親切にして居る處を終始見て居たからで、のみならず、愛の化身ともいふべき此子供は、其周囲の人を喜ばしめなれないといふ事はない。生れてから、嫉妬とか情疑とか其他の惡徳を経験したことの無い身に取つては、自分にもその様の汚心の起り様もないので、人は皆自分と同じ様に清い美しいものだと思つて居るのである。従つて此子供嫌ひな頑固な疝癩なお祖父さんも、

どうしても此子供丈けは愛せずには居られなくなつて来た。慈善などいふことは一つも知らないのであるが、夫でもセドリツクは、お祖父さんほど慈善の方は世の中にないと信じ且つ公言して居る。といふ有様で、とうとう此お祖父さんは、セドリツクの愛の爲めに、全く新しい性質の方に變つて仕舞ふ。そうこうして居る中に、そこへ一人の女天一坊が起つて、自分こそは、侯爵家の總領息子の妻で、夫はなくなつたが侯爵家の相續人たるべきものは、私の子供であると名告つて出る。所が、セドリツクに心から打ち込んで居るお祖父さんは、どうしても之を信じない。然し向ふにはいらく偽りの證據を持つて出る。お祖父さんは夫が悪くつてく仕様がない。其惡しみると、セドリツクの愛とは、遂に此頑固なお祖父さんをして、



今迄一概に輕蔑して同居を許さないのみならず、一度の面會をも許さなかつたおつ母さんへ自分から馬車を擡げてお城に迎へるといふ話で、讀み來り讀み去つて、心に殘る所は、一生愛といふことなど知らなかつた老人でも感化されるといふ、小さい愛の大きな力と、そしてその力に世に下したものは、つまり母の感化の力にあるといふことで、私は此一篇の小説は幾多の教育學などよりも遙に有力な教訓を家庭教育に與へるものと信じます。

會 報

入 會

高知縣師範學校女子部寄宿會

同

東京市深川區西大工町一、

四日市濱田沖ノ島一八五七、

山崎芳代
右紹介小柳ゆき
酒井 島

右紹介小柳ゆき
馬場 庸
右紹介下田たづ
久米ふみ

右紹介關壽賀

會費領收 自明治三十八年二月廿五日 至同 三月廿七日

金額	年 月 日	姓 名
一〇〇	三、八、二	庄司なか
一〇〇	三、七、九	武井とめ
六〇	三、八、一	森乙女
一〇〇	三、八、一	小松すほ
一〇〇	三、六、二	矢島とせ
五〇	三、八、一	福田米
五〇	三、八、三	宮澤たまき
三〇	三、八、三	武田たつ
三〇	三、八、三	増澤なみ
五〇	三、七、一	脇山まさ
一〇〇	三、八、一	町田孝
四〇〇	三、八、一	柳 孝
一〇〇	三、八、五	柳 孝
一〇〇	三、八、四	柳 孝
一〇〇	三、九、二	柳 孝

二〇〇	四〇〇	三〇〇	五〇〇	四〇〇	五〇〇	二〇〇	一〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇	六〇〇	一〇〇	一〇〇	八〇〇	二〇〇
三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一〇	三六、五	三七、一〇	三八、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三五、九	三八、一二	三八、一二	三八、三	三八、三	三八、一〇	三八、一〇
三七、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、六	三八、七	三八、七	三八、八	三八、八	三八、八	三八、八

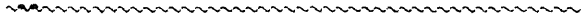
山口酉三郎 大羽ひさ 波多野とく 喜多見佐喜 下村三四吉 町田則一文 廣重一枝 近藤しげ 小原末三 市原すみ 新井博次 立花はる 吉村千鶴 加藤せつ 堀越源次郎 伊藤藤成 今立富壽 西島富三 武田富三 鳥居鏡三 富岡龜門 新開みゑ 藤井ちゑ 福井芳雄 小笠原芳雄 山崎芳代 小柳ゆき 中屋とみ

五〇〇	八〇〇	八〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇
三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七	三七、七
三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一	三七、一一

池袋すね 佐久間えい 安西せい 松島八重 水口みつ 岩崎たつ 永田かい 中桐太郎 伊藤鐵太郎 川村鐵太郎 長興のぶ 大竹みさを 寺尾きく 利光しづ 中島行徳 加藤たけ 近藤つよ 江藤みほ 鍋島いし 尾立しほ 早川いし 池田その 猪俣みさを 石川カネ 福川ふく 馬場せん 立花せん 中村しん

一〇〇〇	一〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	二〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	六〇〇〇	四〇〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一七〇〇	一七〇〇	五〇〇〇	五〇〇〇	一五〇〇	一五〇〇
三七、七	三七、七	三六、二	三七、七	三七、七	三七、七	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一	三七、一
三八、三	三八、三	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二

東	吉	田	樋	三	井	牧	鈴	佐	小	斯	尾	横	波	矢	南	佐	森	下	中	星	河	福	矢	高	三	山	忍	松
田	田	口	輪	村	村	木	木	外	池	波	山	山	佐	作	摩	方	岩	田	村	合	合	田	澤	橋	島	崎	田	山
し	し	み	き	も	し	あ	き	を	ん	み	や	け	み	み	て	ま	太	た	五	ち	ち	ふ	わ	し	つ	彦	千	い
な	け	す	ち	と	よ	を	ん	み	み	や	け	み	み	み	て	ま	太	た	五	ち	ち	ふ	わ	し	つ	彦	千	い



三〇〇〇	五〇〇〇	二〇〇〇	一〇〇〇	一三〇〇	四〇〇〇	一四〇〇	一四〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	九〇〇〇
三八、一	三八、三	三八、四	三八、四	三七、一〇	三七、一〇	三七、一〇	三七、一〇	三七、九	三七、九	三七、九	三七、二	三八、二	三八、四
三八、三	三八、七	三八、五	三八、五	三八、一〇	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、二	三八、九	三八、九	三八、二



武	小	藤	三	柳	竹	後	林	伊	谷	高	麥	磐	久
井	野	谷	輪	原	島	閑	菊	藤	田	橋	倉	井	米
綱	ふ	い	も	英	茂	野	蝶	弘	じ	忠	は	廣	ふ
枝	み	わ	と	子	野	蝶	一	ん	ん	次	つ	子	み

正格 割烹教授 男子部 生徒募集

本會附屬石井式教場に於て、本四月より左の各科により特に男子部を開設し、女子部と對照して、真正の割烹學科の價値を知らしめ、且費用を簡易に、授業を懇篤にし、希望者の便益を計るべし

男子部は世間の割烹大家及び割烹業者の入學を許し教授とする物
●他の一般志望者をも教授す

(茶懷石料理科 服紗料理科 儀式料理科 式庖丁科)
(剝物尋常科 同 高等科 西洋料理支那料理科)

女子部は家庭必用の料理法を教授す

(尋常科 高等科 師範科)
(撰科 (西洋料理科) 支那料理科)

●詳細は規則について見られたし

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本割烹學會附屬

明治三十八年

四月

石井式 割烹教場

擔當講師 料理師範八世 石井 治兵衛

文學部主任 石井 泰次郎

心の花

編輯主幹

佐々木信綱

第九卷 第四

(四月一日發行)

- 藝術と人格
- 陣中手柬
- 琉球浦島傳説
- シルレルの面影
- 春のわかれ
- 奇劇わねいもと
- 責任
- 由比が濱
- 桂園一枝抄註
- うらみ顔
- ゆめ
- 近世歌人逸話
- 紀貫之卿筆蹟論
- 二十五絃
- 琉球の短歌
- 沙河觀戰談
- レナウの詩
- みぞれ降る日
- いでゆの宿

▲ 定價一冊郵税共拾參錢 ▲ 投書を歓迎す
▲ 日本橋區本石町一ノ一 竹栢會出版部

藤井文士 森鷗外 鴻巣樞 三浦文學 野浦の學 大塚楠緒 沼波文學 某上通 井上重子 小橋山内 井上頼子 小杉文學博 川田曙 昇田竹 角田竹 氏家摩琴 石搏千亦 佐々木信綱

リセ領受ヲ牌賞等壹第 於ニ會覽博國內回五第ハ琴風製葉山

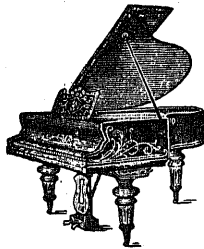
明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可



山葉製風琴

(附 險 保)

- 壹號形金拾六圓五拾錢
- 貳號形金拾六圓五拾錢
- 參號形金拾七圓
- 四號形金拾八圓
- 五號形金拾九圓
- 六號形金拾九圓
- 七號形金拾九圓
- 八號形金拾九圓
- 九號形金拾九圓
- 十號形金拾九圓
- 第十一號形金拾九圓
- 第十二號形金拾九圓
- 第十三號形金拾九圓
- 第十四號形金拾九圓
- 第十五號形金拾九圓
- 第十六號形金拾九圓
- 第十七號形金拾九圓
- 第十八號形金拾九圓
- 第十九號形金拾九圓
- 第二十號形金拾九圓



○山葉製洋琴 各金參百圓以上
 ○船來洋琴 三百圓以上
 ○船來風琴 三百圓以上
 ○鈴木製ウァイオリン 五百圓以上
 ○金五圓以上各種
 ○十圓迄各種其
 ○他弓箱附屬品
 ○等各種
 ○樂隊用陸軍吹奏器各種
 ○戰隊用陸軍吹奏器各種
 ○人組紀念國旗印銀器各種
 ○右の外手風琴、ハモニカ、船來フラジ
 ○各種郵券、御送附、美觀なる目
 ○各種進呈す



新刊音樂書

- 林廣守作曲、ノエルペリー先生和聲 美本 定價金拾錢 不要郵稅
- 一君が代 高須治輔先生作歌、本元子作曲 頗美本 定價金拾錢
- 一西比利亞地唱歌 頗美本 定價金貳拾五錢
- 一北村季晴先生作 (第參版發行) 頗美本 定價金貳拾五錢
- 一第一篇 須磨の曲 頗美本 定價金貳拾五錢
- 一第二篇 離れの小島 頗美本 定價金貳拾五錢
- 一第三篇 露の夢 頗美本 定價金貳拾五錢
- 一ノエル、ペリー先生編 練習書 大形洋裝 定價金五拾錢 郵稅金八錢

シガラオノアピ
 繕修律調